

DRAMA かながわ **60**

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866



二都物語の幕が開く

演劇プロデュース「螺旋階段」 緑 慎一郎

神奈川県演劇連盟50周年記念合同公演「二都物語」がいよいよ開幕する。

総勢50名を超えるキャストが一つの壮大な舞台を作り上げるために歌い、踊り、叫び、そして時には涙しながら突き進んでいる。小さかった歌声は徐々に大きくなり、緊張感のなかった動きが時代に追い詰められた人々へと変わる。経験したことのないような舞台装置と独特の世界観。新旧の劇団の融合。そう、これは時代の幕開け。

「二都物語」は新たな神奈川県演劇連盟50年の始まり。間

もなく「二都物語」の幕が開く。新しい時代の幕と共に。

公演日時：2010年12月18日(土)13:00/18:00・12月19日(日)13:00

会場：神奈川県立青少年センター

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

入場料金：前売2,000円/当日2,500円 ※全席自由・税込
高校生以下・65歳以上 前売1,000円/当日1,500円

お問合わせ・チケット申込先：神奈川県演劇連盟

TEL. 080-5659-2757

MAIL. kenkyujo@yokohama-engeki.or.jp

「青少年のための芝居塾」開催報告

まずはじめに、今回の「青少年のための芝居塾」の始まりから終わりにかけて、見に来ていただいたお客様と様々な面でサポート、指導をしていただいた神奈川演劇連盟の皆様、そして多目的プラザに入ってから、進行や指導をしていただいた青少年センターの皆様。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

昨年に引き続き2回目の芝居塾の参加となり、前回よりも……と言う表立ったプレッシャーはなかったのですが、劇団自体はそれを感じていたと思います。

今回は前回から変わり「青少年のための芝居塾」と言うことで、年齢層の幅が広がり、様々な塾生が参加されました。「前回の芝居塾を見て」や「学校にチラシが来て」などなど色々な参加理由がありましたが、前回の参加人数を越える16名の塾生が参加していただきました。

さて、またしても前回に引き続き起きてしまった事件は、参加した塾生16名の内15名が女性で、私たちの劇団にはほとんどが男性であるために、どのように稽古を進めていこうかという問題でした。また塾生内での派閥やいじめ、ありとあらゆる起こりそうな事件をピックアップし何度も劇団内で話し合いの場がもたれました。実際そんなことは起きず全て順調に出来ました。参加した男子高校生は昨年に引き続き2回目の参加でした。環境は問題ではないようでした。

稽古の進行についてはやはり最初の方は、塾生全員が戸惑っていたのを覚えています。その点に関しては、昨年参加した塾生たちが先頭に立って、手本を見せるということではなく、こういうことをやっていくから、まずは自分が！という意思表示が前面に出ていました。これにはやっていて良かったという満足感と、「やる」を選んだ彼らに感動しました。自分から発信する。受動態ではなく、能動態に切り替える。選択肢の「やる」を選ぶ。考えずに行動する。かぼちゃのスタイルの大きな枠ですが、役者個人の可能性を十分に生かすという考えが浸透するのに時間はかかりましたが、この芝居塾を終える頃には、塾生全員が自分から発信し、面白い事をお客様にも見て欲しい、一回一回をやりきる精神がにじみ出ていました。体育会系のような感じがしますが、若さと勇気と根性。よく耳にしていました。

本番ですが、8月19日から22日までの4日間、計6回の公演を打つことが出来ましたが、やはり問題はお客様と言うところです。やはり土、日に集中して混雑が予想されると話し合いが何度もされていましたが、面白いことに一番最初に前売りが完売になったのは19日の初日でした。続いて22日の千秋楽。予約の段階でマックス100名のところを予約で98名。当日券が出せない状況でした。何とか、塾生にお願いをして、お客様の中から、日にちをずらせるかというお願いをして最悪の状況は免れました。総集客数はトータルの90パーセントを超え、毎回毎回温かいお客様に見守られ、塾生含め私たち劇団員も生き生きと本番を大成功で終えることが出来ました。

アンケートの収穫率ですが、これも70パーセントを超えて

おり、この中から、ありがたいコメントをいくつかご紹介させていただきます。

8月19日 観劇が初めてだったのですが、とても素晴らしい思いをさせていただきました。光の演出や角度での見せ方、様々な角度から見ていたいと思えるものでした。

8月19日 久しぶりに若い人の演劇を見て、やっぱり楽しいなどつくづく思いました。この多目的ホールは研修などで何度も使ったことがあるのに設定の仕方一つで、随分と雰囲気が変わるのにもびっくりです。座席の設定の仕方も良かった。

8月20日 エネルギーッシュなパフォーマンスどうもありがとうございます。あつという間に2時間経ってしまいました。選曲が私好みでした。恥ずかしながら原作のロミオとジュリエットは知らなかったのですが、とてもいい形で知ることができました。

8月20日 どうせ歌うのなら、曲を作って、全部歌って欲しいと思いました。

8月21日 使っている曲が昔からあるものを使っていて、40代の私にはなじみがあり良かった。お話しにも昔からあるもので、演出によってこんなに変化ある芝居になるんだと不思議に思うと同時に感動しました。

8月21日 青少年の方々が生き生きとして、とてもよかったです。機会がありましたら来年も見たいです。

沢山の中から、選ばせていただきました。中には「こうしたほうが……」という希望の内容もあり、書いてくれる、それだけで大切な財産になります。塾生もこのアンケートを見て、喜んでいました。

昨年に引き続き2回目の「青少年のための芝居塾」でしたが、参加した塾生一人ひとりが生き生きと輝いて舞台上に挑んでくれました。辛かったと思います、逃げ出したくなる時もあったと思います。それでも、演出家はじめ私たちを信じてついてきてくれた、彼らの行動は大きな進歩だと思います。自分の学校や他の芝居に出たときに、何かしらの形で、あの夏休みの3ヶ月は面白かった。楽しかった。と思っただけなら幸いです。

最後に、様々な角度から指導、サポートしていただいた神奈川演劇連盟、神奈川県立青少年センターの皆様にもう一度お礼を申し上げます。ありがとうございました。

〔風雲かぼちゃの馬車：菅本 生〕



K A A T (神奈川芸術劇場) 柿落とし公演の報告とこれから

神奈川県演劇連盟理事長 横田 和 弘



残念ながら 横内謙介氏演出の合同公演は 中止となりました。報告です。詳細は 長くもなりますし 理事会で報告済ですので 各理事に確認してください。

正直 残念な報告ですし 大変なことに……というのが最終決定されたときの気持ちでした。当初から 横内氏ありきで出発した企画でしたので 心の準備のないまま此処まで来たことすし 一からはじめるのには 与えられた時間も少ない 厳しい……。

さらに 大きな問題点といえば 「12月に続き合同公演が行われることへの不安」 1300のキャパに伴う「集客の不安」など…… 今までは 横内演出が 大きなモチベーションとしてあったわけですがそれが失われたのですから正直ショックではありました。

が 今は そうは思わない。大きなチャンスだと考えています。

最新の 至れり尽くせりの 注目の劇場で3週間にわたって県演連が独自で その力を示すことができる場を与えられたのです。何を ネガティブになることがあるのか……

宮本亜門・三谷幸喜と並んで ラインナップされる榮譽に何を躊躇う事があるのか……

新しい活動の場を獲得するのに 何を躊躇するのか……の想いに変わってきています。

事実 具体的なプログラム創りに入り 大ホール1週間 中小スタジオ2週間の与えられた時間と空間を日一杯使い メイン公演 子どもたちへの演劇開放週間 湘南地域中心の合同公演 と3本の企画が進められています。まだ 具体的なレパートリーは決まっていますが 近々報告できるはず です。

合同公演が続き自主公演が出来ない……経済的なこと…… 体力的なこと……確かに 厳しい現実があることは事実です。

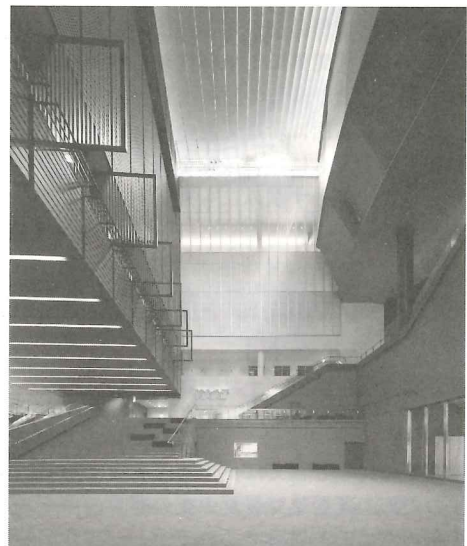
でも 新しい芸術劇場に期待することは 大きいですし これからの我々神奈川の演劇環境が変わってくる可能性がある劇場だと信じています。そういう意味では 芸術劇場との関係は 我々県演連にとっても 一つ一つの劇団にとっても魅力的なもの 大切なものになるはず です。

青少年センターと 芸術劇場 この二つが我々の支えとなれば なんと恵まれた環境になるのでしょうか。

乗り越えることでも ピンチでも何もないはず です。贅沢な環境で芝居創りが出来るのです。多少の苦勞をためらわず ポジティブに取り組みたい……そう思っています。

必ず 良い結果がついてきます。県演連を大きくするチャンスですし 県演連の体力をつけるチャンスなのです。それは 県演連傘下のみんなの力になるのです。

力を貸してください……。というより 是非 楽しんで これからの企画に参加してください。



芝居を観る

2010年7月～10月

劇団葡萄座

「さくらの苑におぼろなる」

作/田畑喜十 演出/山本伸二

2010年7月10～11日 於：スペース・オルタ



舞台は普通の男の一間。しかし、満開のさくらと椅子に座る女性が、客席まで汗臭さが漂ってきそうな男部屋を「さくらの苑」に昇華させる。室内で傘を差す女性の不条理っぽさが「これから何が起き

るのか」と興味をそそる。

部屋の住居人の青年秀一は自分の部屋に見知らぬ女性朋子がいることに驚く。朋子はこの部屋のかつての住居人、和哉に会おうと部屋に“侵入”していたのだが、朋子はそれを最後まで言わない。この2人に隣の道代、秀一の恋人京子、さらには両親まで加わって2人の「おぼろなる関係」を解きほぐそうと探り合う。

その探り合いは「掛け合い漫才」風に進む。山本演出はしかし、このやり取りを可笑しくではなく、丁寧に真面目に処理した。それが丁寧すぎて、特に前半、もっとポンポンと掛け合ってもいいと感じさせる。

しかし、秀一と京子は純情さを全面に出すことに成功。朋子は安定した演技で舞台を支え、道代はどこにでも本当にいそうな役柄を観客まで届けた。

また脚本にはない団子が登場する。さくらに引っかけて「花より団子」の意味もあろう。が、朋子と道代がセックスについて語る場面を、団子を食べながらにしたことで、とかく猥雑になりがちなセックス話をさりりと聞き流せるように仕掛けた演出は、好感が持った。また音楽の選択は、私の好みとぴったり合ったこともあるが、舞台とマッチしていて効果的だった。

この脚本は25年前の作品ながら主題は少しも腐っていない。むしろ「おぼろなる」人間関係は毛筆時代から携帯時代になって益々曖昧なものとなっており、この芝居を舞台に乗せる意味は今日さらに深い。葡萄座は前回、新進気鋭の本谷有希子作「遭難」を公演、印象的な照明とともにいい後味を残した。新作のほかちょっと古い作品を現代に生かす試みにも挑戦する葡萄座の今後の活躍にエールを送りたい。 [劇団さく座：一花徹]

風雲かぼちゃの馬車+劇団スクランブル

「ダンブル・ウィード」

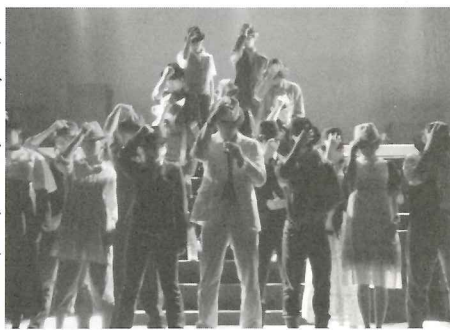
作/坪井俊樹 演出/土井宏晃

2010年7月10日～11日 於：テアトルフォンテ

風雲かぼちゃの馬車と言えば、土井宏晃氏である。昨年の県演連の高校生のための芝居塾で「夏の夜の夢」のキャストと演出、今年の青少年のための芝居塾で「ロミオとジュリエット」の演出、

また、12月の合同公演の作・演出も決まっている、県演連加盟劇団の中でも、その活躍目覚ましい人のひとりである。

私も、「夏の夜の夢」は観に行った。高校生たちが加わっていたこともあり、勢いのある楽しい内容だった。今回は、かぼちゃの馬車だけでなく、劇団スクランブルとの合同公演だった。劇団スクランブルは、2008年に神奈川大学OBを中心に結成されスタイリッシュ・コメディイヤーを作風としているとのこと。



そういう劇団同士がコラボするのであるから、リズムカルで勢いのある芝居を想像して出かけた。

確かに勢いはあった。しかし、私には話しの展開の把握が困難で、気持ちが入っていけなかったというのが正直な感想である。

「シカド」という町のギャング一家のドンが死に、その後継者や資産はどうなるのかという話しなのだが、登場する人物がとても多くて、その関係を掴むのに苦労してしまった。というよりも、公演が終わってから、ちらしを見て思い出しながら、確認したのである。オリジナルであるほど、ちらしに、もう少しストーリーの概要とか、登場人物の関係などを書いてもらえると、もっと話しに入って行きやすいのではないだろうか？ いっしょに観に行った者も同じようなことを言っていた。ぜひ検討をお願いしたい。更に言うと、一部のキャストの方は言っていることがわかりにくい。セリフを観客にきちんと届かせるという最低限のことはきちんと押さえるべきだろう。そんな中、やはり若さあふれる勢いの良さには感心するとともに、ホテルの女将さん役がきらりと光っていたのが印象に残っています。勢いは残しつつ、改善を加えていただければなあと思います。 [劇団かに座：折笠安彦]

劇団河童座

「オズの魔法使い～オズを探して～」

原作/ライマン・フランク・ボーム 脚色・演出/横田和弘

2010年7月31日～8月1日 於：相鉄本多劇場

「オズの魔法使い」って、昔の記憶で定かでないのですが、このお話は歌あり踊りありの華やかなミュージカル仕立てだったような気がします。ですが、今回の河童座さんの公演は、それを限られた



空間のなかでテンポ良くコミカルにまとめられていて「知恵」と「勇気」と「心」の大事さというテーマもしっかりと伝えていて

いました。目をキラキラ輝かせて見入っている子供たちに混じって、私も童心に帰って理屈無しに笑い楽しませてもらいました。

ライオンさんの歌傑作でした。大笑いしました。

私自身を振り返ってみれば、子供の頃に子供向けのお芝居を観に行った思い出はないのですが、それでも時々近所に紙芝居やさんが来て、それを走って追いかけて観に行ったりしました。ドキドキ……ワクワクして観たものです。テレビも映画も生活の中にありましたが、スクリーンではなくて、生のお話を聞きながら観られる喜びは他の物には変え難いものでした。

うちの子供たちがまだ幼稚園の頃、近所の大ホールでプレーメンの音楽隊が上演されて、親子で観に行きました。客席の横をニワトリさんなど動物達が通るのをキラキラした目で見ていました。その時のことは子供たちも今でも覚えているようです。

お話の内容はすっかり忘れてしまっても、自分達の目線にしっかり答えてくれた動物達（役者さん達）の印象はまだ記憶に残っているようです。親になっていた私もその時のキラキラした子供の顔と役者さん達の一つに見えたりしました。

今ではうちの子供たちも大人になって映画館の3Dシアターで気軽に立体画像を楽しむこともあります。でも立体であってもそれは画像に過ぎません。未来多き子供たちに、河童座さんの公演のような生の3Dシアターを観て欲しいと思うのは私だけでしょうか？そこは、役者と観客が一体となって作り上げる血の通った演劇空間があります。

かかしさん「どんなおまじないだったかなあ？」

客席の子供たち「え〜と……」

ブリキさん「パンフレット見ればわかるよお」

観客（爆笑）

役者さんと観客がひとつになって楽しい時間を過ごさせていただきました。

[劇団葡萄座：荒木久美子]

劇団やぶさか

「犬 神」 脚本・演出／海老原あい

2010年9月11～12日 於：県立青少年センター・多目的プラザ



初めて「劇団やぶさか」のお芝居を見させて頂きました。私は現在六十三才、私の長女は三十一才となりました。おそらく娘と同年以下の方のそれも女性ばかりのお芝居にとっても、感激しました。「妖

と「時代モノ」がテンポ良く調和して表現されていました。負の化身、土蜘蛛と梵天との憎しみの連鎖と愛の実現の戦いはテーマ性を抱きつつ最後まで観客を飽きさせなかった。

ただ、ただである、若さもあり、動きもあり感動もあるのだが、それが細切れに提示されているので追いつくのが大変だった。それが「少年ジャンプニュアンスであり、ヘビメタル系のノリ（代表挨拶より）の良さと言え言えるのだろうか。

ただ、又、ただであるがお芝居を観る楽しさは、自分にはないものを観せてくれた時に、感激という言葉が出てくるものであり、それはそれで良かったと思っている。「妖で全て許されると思うなよと、いうツッコミ（代表挨拶より）」は私にはなかったし、最後には力を得て劇場をあとにすることができた。

ありがとうございました。

[劇団蒼い群：村田次郎]

劇団きさく座

「限界ストアー」

原案／鈴木博幸 脚色／劇団きさく座 演出／高橋行恵

2010年9月26日 於：平塚市中央公民館大ホール



限界集落。聞きなれないこの言葉は、住民の半数以上が65歳以上で冠婚葬祭などの共同体の維持が限界に達している集落のことをさす言葉である。まず、この言葉に驚いた。

集落だけではない、

この国はもう限界に来ているのかもしれないと考えさせられる言葉だ。そんな限界集落を舞台にした「きさく座」の『限界ストアー』を観劇してきた。舞台が始まる前にパンフレットを読んでいたの、ある程度、物語の予想をしながら観劇することができたのだが…。冒頭はそと舞台での演技から始まる。二人組のカップル、二人組の刑事。この二組が上手下手でそれぞれ演技するのが冒頭で重大な事実を告げられる。オレオレ詐欺を行っていたことを妻に告白するのだが、ちょっとあまりにも投げやりな告白に少し説明くさくなってしまった印象を受けた。事件の告白としてはあまりにも唐突。だからといってオレオレ詐欺自体は物語に大きく関わってはこない。事件を起こしたことがきっかけの話なのでこの事件を起こした動機は後々の展開で重要だと思うのだがどうだろうか。

追われているカップルと追いかける刑事が行き着く先が母のいる限界集落。タイトルにもあるようにストアーが舞台上に作ってある。個性あふれる限界集落の住人の演技は田舎らしさもあり安心感もありとても好感もてる。また、ストアー自体も村に一軒しかない設定を考慮したメニューなどがなるほどと思わせてくれる。ただ、この田舎的な間の取り方と都会から来た二組の二人組の間の取り方に大きな変化は見られない。田舎の時間に飲み込まれてしまったのだろうか、刑事二人の面白いやりとりもスピード感があればもっと客席は笑顔に包まれた。人情溢れるクライマックス、ここに母と息子の気持ちをもっともっと伝われば最後のふるさとの独唱に涙を流していた。それほど冒頭の動機付けは重要だったのではないかとラストがいいだけに惜しい印象となった。

きさく座の手掛ける愛のあふれる舞台をこれからももっともっと期待する。

[演劇プロデュース『螺旋階段』：緑慎一郎]

ラゾーナ川崎プラザソル

Ultimate Games 「Primal+」

脚本／伊藤裕一 演出／天野高志 製作総指揮／笹浦暢大

2010年9月30日～10月5日 於：ラゾーナ川崎プラザソル

会場に入って目を引いた白の布のドレープがドラマティックな物語を予感させる。それも一つのいい演出である。

物語は「近未来に突然発生したウイルスにより生まれた「不死身のヴァンパイア」を滅ぼすためにウイルスハンターが自らの生命エネルギーを感染者の体内に送り込み死闘を繰り広げる。ひとりの感染した少女の「命」をめぐる絡まりあう「思い」の先にあるものは……」観ていて内容が解らなかつたわけではなく観ていない者にストーリーを文字にして正確に伝える言葉が見当たらないという意味で「UltimateGames」のHPの粗筋を引用させて頂



きました。若さとは武器である(笑)全てを飲み込むパワーがそこにはあった。圧倒的なインパクトに会場は釘づけになっていたのか……呆気にとられていたのか(笑)ややこしい物語には違いないが会場にはややこしさをモノともさせない「雰囲気」が蔓延していた。

ヴィジュアル系のライブ会場のようなゴス系の衣裳が飛び回り宝塚張りの個性的な煌びやかさと派手な殺陣。演劇とか芝居という言葉よりも「ステージ」とか「パフォーマンス」に近い舞台だったというのが感想である。じっくり物語をかみ砕いて心に沁み込ませる「観せる」作りではなく「魅せる」ものという舞台にまんまと呑みこまれた2時間弱だった。

個人的にヴァンパイア好きなあたしだけにヴァンパイアに感情がないという設定には少々残念な感否めませんでした(笑)地元にも数多くの若い劇団があってこの手の舞台はよく拝見しますが彼らが観たらきっといい勉強になったんじゃないかな……さすがに役者陣も他所で活躍されているだけに個性が偏っていなかったし音響・照明の技術やこだわりも感じられたのはいいとこ取りのプロデュースユニットの強みかもしれない。

それにしてもこの舞台をどう書綴ったらいいものかと劇評を引き受けたのは失敗だったかもしれないと苦笑いしながら改めてパンフレットを読み返しこんがらがった糸を解きほぐしてみたら最後に残ったのはやっぱり「若さって……素敵。」

【劇団こゆるぎ座：保乃しんり】

横浜演劇研究所附属・横浜小劇場

「もろびとこぞりて」 作/北村 想 演出/飯田克衛

2010年10月16～17日 於：県立青少年センター・多目的プラザ



横浜小劇場「もろびとこぞりて」を観劇して来ました。今まで私の都合とのすれ違いで横浜小劇場の観劇は今回が初めてです。他劇団とは違って独特の雰囲気を感しました。

話の内容は3人のあまり売れない女優のコミカルで切ない現状の吐露と不確実な明日への最後の賭けに出ようとする、切実で滑稽なストーリー。

台詞の1つ1つが自然に身体の中に溶け込んで行く内になぜか私のもう1つの意識の中に2人の沢田研二が浮かんできた。「古い映像に残る恰好に最大限気を使った過去のジュリー」と「デブで悪いか！ と居直った還暦ジュリー」。この2人の間には長い長い空白があり、繋がりを埋める事ができない。どちらも私の相容れない存在なのに、なぜそんな突拍子もない事が浮かんできたのだろう。希望と野心に満ちた若き自分と、根拠の無い自信と挫折に色どられた今の自分に重ねあわそうとしているのか。

3人が「待っている」のは誰？何？なのか。その状況は「無作為の必然性」なのか、作者が語らせる「リアリズム」とは、何か、

芝居の進行とともに思考しながら自分に問いかけてみたが、頭の悪い私には明快な解答は得られなかった。ただ次から次と古い映像や、現代の諸々の現象が走馬灯の様に浮かんで、消えた。

結局3人は不確実な「旅路の果て」に向けて前向きに気おらず歩きだすのだ。それは還暦を過ぎた私を含めた諸々の人々の今日、明日の姿でもある。締め「ザ・ビーナツ」を聞きながら退場する役者に自分を重ねていた。

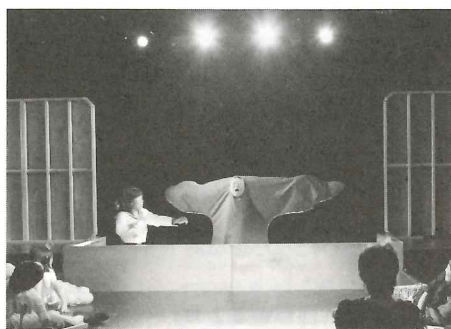
劇評として何が言いたいのだとお叱りを受けてしまいそうだが、お許し下さい。ただ、劇を見終わった感想としてはとても心地良いものだった事を付け加えさせていただきます。

【劇団よこはま壱座】

G/9-Project

「風呂場湊」 作・演出/仲尾玲二

2010年10月22～24日 於：県立青少年センター・多目的プラザ



物語は、父親を亡くした事で、真っ直ぐな心を失った、とある港町に建つ旅館の娘「ミナト」が主人公。ある時、突然現れた天使と、港に迷い込んでしまった弱ったクジラを助けることでその心を取り

戻させてくれるという約束を交わす。その約束を果たすため町を飛び出し、行く先々でそれぞれに夢を持ちながらも挫折しようになっていく、ハッカーや野球少年などに出会いながら奮闘していくというお話。

舞台セットはシンプルが故に少し寂しさを感じましたが、真ん中に作られた大きな風呂場にキャストが飛び込むシーンがあったり、客席後ろからキャストを登場させたり、会場全体を使って上手く場面展開がされていたと思います。また、出演者の年齢層も幅広く、それぞれのキャラクターに合ったキャストがされていました。

ストーリーの中には、ミナトを謎の人物に扮して亡き父がずっと見守っていたりと、温かい気持ちにさせてくれる設定があり、大人も子供も楽しめる作品だったと思います。

ただ、前半からテンポがとても早く感じたので、もう少し丁寧な間が欲しかったと思います。また、途中にあった歌とダンスをもっといろんなシーンに取り入れたら、構成に面白さが増したのではないのでしょうか。

私個人としては、主演の娘役を演じていた仲満さんが、様々な出合いを重ねて真っ直ぐな心を取り戻していくうちに、自然と素敵な笑顔を見せていたのが印象的でした。

この作品は今回で再々演とお聞きしましたが、またこの作品を上演する際には登場人物を増やして、さらにドタバタさせるともっと面白いのではないかと思います。

【ラゾーナ川崎プラザソル：延田知香】

劇団よこはま壱座

「笑う店には、福きたら!？」

作/三木直史 演出/濱田重行

2010年10月29～31日 於：ラゾーナ川崎プラザソル

「よこはま壱座」の旗揚げ公演。劇場に入るとすぐにつくり込ん



だ舞台装置が目に入った。最近では、なかなかつくり込んだ舞台装置を見ることは少なくなってきた。しかし横浜の劇団ではまだまだ見る機会がある。その中でも「よこはま壺座」はハイクラスの装置を

造ったと思っている。昭和の匂いのするいい舞台装置だ。

劇がはじまるとベテランの役者達はその味を生かして展開させていく。驚くべきことは、かなりのハイスピードで展開していくのだ。台詞、動きが流れるように進行していく。かといって間がつぶれたり、悪いという意味ではない。その中で三人や四人が同時に動きを決めるところが数か所あるのだが、それもびったりと息がっている。よいアンサンブルの形が出来ていた。旗揚げ公演としての意気込みのようなものが伝わってくる。それにしても、驚異的な記憶力と身体能力である。中盤少し失速した感があったが最後はやはり前半、中盤が前振りのように、ゆっくりグッと引きつける演出・演技になっている。ここはさすがである。ベテランの役者さん達がここからが俺達の見せ場だ、時間だ、なんとしても物語をまとめてやろう、という気概を感じる。緊張感と余裕、守りと攻めの入り乱れたよい舞台でした。

最後に旗揚げ公演おめでとうございます。これからの発展を心よりお祈りしております。 [風雲かぼちゃの馬車：土井宏晃]

劇団麦の会

「みなと地方裁判所 ～踊る評議室～」

原作／筒井康隆「12人の浮かれる男」 脚本・演出／小金井敏邦

2010年10月30～31日 於：相鉄本多劇場



日本でも裁判員制度が始まり、11月はじめには死刑判決の判断を迫られて、この制度に関する国民の関心はまた一段と高まった。この時期に麦の会が劇団員小金井さんが書いた「踊る評議室」を上演

したのは、まことにタイムリーであった。

アメリカの陪審員制度については、レジナルド・ローズの脚本による映画「十二人の怒れる男たち」やその舞台化で既に有名だが、この作品は日本で俳優座劇場がプロデュースして良い舞台を見せた。麦の会は筒井康隆による「十二人の浮かれる男」を元に、劇団員小金井さんが脚色演出した。座付き作者の良いところは、劇団員の個性を十分に発揮した脚本が書けることで、稽古の過程でも役者の個性を伸ばし得ることだ。3人の裁判官と6人の裁判員、そして3人の補充裁判員を法廷に配置しての裁判劇が、それぞれのキャラクターをうまく生かして練り広げられ、麦の会の新しい喜劇が展開した。

山口雄大さんの抑制のきいた芝居、古澤亮さんのすごみをきかせた演技、沈黙が条件の補充裁判員2の新谷さんの出しゃばり発言演技など、演技者の特性を生かした作者である小金井さんの演出は、最後まで沈黙を守った補充裁判員3の榎本さんの発言で幕

を引かせるなど、見事だった。欲を言えば、もう一ひねりして社会性のある批判発言を、数学の先生役の山口さんにさせたら、麦の会の新たな社会風刺劇が出来ただろうな、と思った。

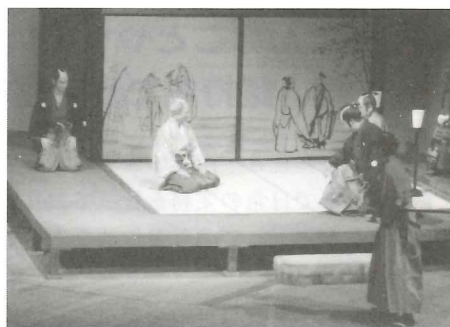
[横浜演劇研究所：飯田克衛]

劇団こゆるぎ座 《創立65周年記念公演》

—小田原幕末伝— 「おさらばでござります」

作／後藤翔如 演出／楠田正宏

2010年10月30～31日 於：小田原市民会館大ホール



創立周年を迎えた、県下の老舗劇団の舞台は、多くの市民の注目と期待で賑わうなかで開幕した。まず、その来場者の多さに圧倒され、しかも前夜の台風通過時にもかかわらず同様の集客を達成したと

言う事を耳にして驚きは深まった。

小田原市の郷土史を基にしたオリジナル戯曲は、NHK大河ドラマの「竜馬伝」に見るような土佐・薩摩・長州藩ではない、歴史の表舞台に出てこないこの小田原藩はどう動いたのか？

幕末から明治へと大きく変わった時代に、普通の人たちはどう関わっていたのか？ 小田原市民が時を越えてこの舞台への親近感と期待を持ったのではないだろうか。途中で退席する人の姿は無かった。セットは、くの字にたてつけた事で余計な障子の開け閉めを違和感なく見ることが出来、田嶋屋内儀・おりくはキャリアウーマンの先駆けのような役をきりりとこなし、秀逸な出来映えであった。ただ番頭達が偉そうに見えて最初はどんな立場の人かと考えてしまうほどに。子役の表現力をもう少し引き出せたら、尼様との場面をより感動的に表現されたであろうと、惜しまれる。又尼様の頭巾の中は、剃髪しているのだから髪が見えては台無しだった。全体に卒なく綺麗に出来上がっているの、人を斬ってきた後、馬で戦場から帰ってきた時、血潮を浴びてもおらず、雨に濡れている様子もなく演劇のリアリズムが否定されたのは否めない。どの場面も、同じような照明で、朝なのか昼なのか夜なのか、お天気なのか雨なのかメリハリがなかった。残念である。

最後のこれから死に赴く城代家老の夫婦の会話が、湿っぽくならず、全体に笑いの無い重い舞台を救ってはいた。おりくの娘おりんまでも死装束で現れ自害するという結末は正に衝撃的悲劇として涙を誘うが、尼様が諭しておりんを尼にして共々菩提を弔うという終わり方が良いのに一と、勝手に思ってしまった。『おさらばでござります』は、確かに、武士の世の終わりでもあるのだから。

[横須賀市民劇場プロジェクト：吉本糸子]

さまざまな時代のポスターでタイムトリップ

さまざまな時代・さまざまな国の公演のポスターが簡単に見られる状況を作った演劇資料室（神奈川県立青少年センター、2階。現在常時展示は10数点ですが、蔵書は100点を超えます。ご希望があれば、閲覧することができます。）その時の、「あらあらしい時代」の空気をたっぷりと感じながらポスターたちに注目することで、時代の空気が垣間見えてくる。そこから時代の空気を読み取ることができると思います。そして、そんなポスターの中で、ゆったりと戯曲を読むのも、楽しいタイムトリップができるのではないのでしょうか。是非、お越しください。

演劇資料室だより

演劇資料室

演劇資料室当番ボランティア求む！

まず、「どんなことやっているのが覗いてみよう。」ぐらいの
軽い気持ちで資料室を訪ねてみてください。

演劇資料室ではオープン以来、荒井・山元の二名による常駐+当番ボランティアという形で日常の業務を行っております。しかし近年、関連業務量が肥大しており慢性的な人手不足が続いている状態です。

そこで皆さんにお願いです。演劇資料室の当番ボランティアとして御協力いただける方を募っています。少しの時間でも定期的にお願ひできる方大歓迎。データベース入力への御協力はなおさら大歓迎ですので、一度演劇資料室へお気軽にお立ちよりください。こんなこと、あんなこと……演劇に関する様々な業務を行っております。

皆さまのご参加をお待ちしております。



【お問合せは演劇資料室 ☎045-263-4400(代)まで】

「神演連五〇年史・編集委員会からの報告とお願い」

高 津 一 郎

「湘南エリア市民演劇10年史〈未加盟エリア〉

逗子市・鎌倉市・茅ヶ崎市など→関口素実

「県北・県央・県西エリア市民演劇10年史〈未加盟エリア〉

相模原市・厚木市・秦野市・山北町など→関口素実

(四)では「四〇年史」で力の及ばなかったエリアの長期年史を補う作業を行います。要するに「神演連四〇年史」の追補篇です。

「横須賀エリア市民演劇四〇年史」→(団のぼる)

「横浜エリア戦前・戦中市民演劇史」→(飯田克衛)

(五)は「神奈川演劇連盟・エリア別一〇年々表」です。ここでは表題の通り〈川崎エリア・横浜エリア・横須賀エリ

ア・小田原-平塚エリア〉の四エリアの記録によって構成します。

- ・「年表」には〈未加盟劇団〉の名称データは載せません。
- ・「年表」は公演年表ではありません。記念公演・特別公演など、エリア内での共同活動、特別の出来事などを簡条書きにし提出して下さい。
- ・「年表」の作成は「各エリア史」の執筆者が同じ視点で判断し作製して下さい。

◎〈編集委員会よりお願い〉

10月11日にかけて公演が集中し、各劇団ともに芝居作りに追われ余裕の無い状況下にあると思いますが、公演終了後には全力を挙げて五〇年史の執筆に取組んで、年内には原稿・画像を提出して下さい。お願いします。

神奈川県演劇連盟加盟団体の記録 (50音順)

- 演劇プロデューズ『螺旋階段』 ●京浜協同劇団 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座 ●劇団川崎演劇塾 ●劇団きさく座
- 劇団こゆるぎ座 ●劇団ひこばえ ●劇団葡萄座 ●劇団麦の会 ●劇団やぶさか ●劇団横綱チュチュ ●劇団よこはま壱座
- 風雲かぼちゃの馬車 ●横須賀市民劇場プロジェクト ●横浜小劇場 ●ラゾーナ川崎プラザソル ●ラ・テラ ●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>